

II-81

北海道の人工海水浴場について

(株) アルファ水工コンサルタンツ	正 員	川森 晃
北海道水産部		鈴木 信義
(財) 漁港漁村建設技術研究所	正 員	角木 修一
(有) 漁港漁村総合技研		大塚 浩二
(株) アルファ水工コンサルタンツ		若林 隆司

1. はじめに

わが国は四方を海に囲まれ、その海岸線は約34,000kmで、国土面積に比較して非常に長いのが特長である。その海岸線は入江、湾、小島が入り込み変化に富み、古くから海上交通、漁業はもちろんのこと、海水浴、ヨット、魚釣りならびに潮干り等の海洋性レクリエーションの場として親しまれてきた。しかしながら、その海岸線は津波、波浪ならびに侵食等により常に自然災害の脅威にさらされてきたのが実情である。また、昭和40年代以降の高度成長における沿岸海域の急速な開発により、海岸環境の悪化がもたらされた地域も数多く、さらに近年の急速な海岸侵食による砂浜の消失は、保全上のみならず、海浜利用の面からも著しい支障をきたしている。また、最近では生活水準の向上、余暇時間の増大、国民意識の変化を背景として、国民生活に占めるレクリエーション需要が益々増加しており、沿岸海域は余暇利用の場として極めて重要な位置を占めている。

このような海洋性レクリエーション需要の増加と多様化に対処するため、現在利用されている海岸ならびに未利用海岸の自然環境を保全しつつ、周辺の海岸とも調和を図る必要がある。また 前浜の消失などにより海水浴場等の機能が失われている海岸、海水浴場背後の狭あい化による駐車場不足、さらに北海道にみられるシーズン中の遊泳可能期間の延長、低海水温による遊泳期間の短縮等北国特有の問題も存在する。この為、これらの問題を解消し、潤いある豊かな魅力ある海岸環境を創出する必要がある。

ここでは特に北海道における海水浴場の現況を把握し、昭和48年以降、北海道において実施、計画されてきた海岸環境整備事例を紹介し、計画の背景ならびにその計画の留意点について報告する。

2. 道内海水浴場の現状

道内の主要な海水浴場は図-1の道内主要海水浴場における遊泳者数に示すように39市町村69ヶ所を数え、その合計遊泳者数は昭和63年度396万人、平成元年度424万人、平成2年度424万人（いずれも開設期間中のみ)¹⁾である。道内の遊泳者数は札幌近郊の小樽市、石狩町および浜益村で全体の5割強を占めている。また、平成2年に海岸環境整備事業により整備され、供用が開始された乙部町が前年比の約60倍の増加となっている。図-2は遊泳者数と遊泳関連施設について調べたものである。札幌近郊の小樽市については公衆便所、更衣休憩室は比較的、数が多いもののシャワーが

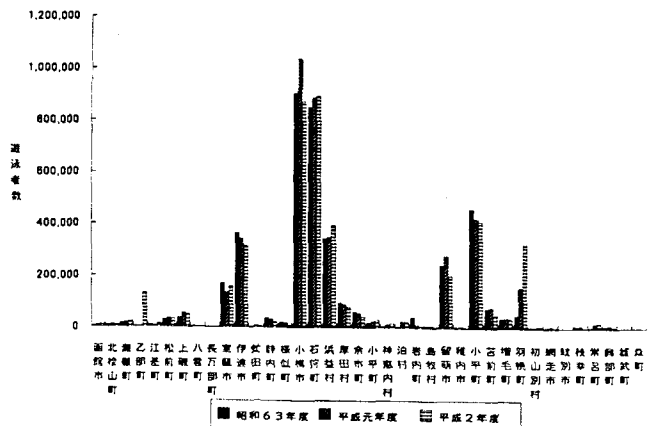


図-1 道内主要海水浴場における遊泳者数

Artificial bathing facilities in Hokkaido by Nobuyoshi Suzuki, Syuichi Kakuki, Kouzi Otsuka, Akira Kaw, Takashi Wakabayashi

遊泳者数に較べて完備されていない。また石狩町、浜益村では遊泳者数に較べて関連施設が未整備であるのに対し、厚田村では遊泳者数に較べて関連施設が多いことが特徴である。

3. 北海道における人工海水浴場建設計画の背景

わが国は南北に細長い国土を有し、特に北海道はわが国のなかで最も北に位置し、オホーツク海、日本海ならびに太平洋の3つの海に囲まれており、海水浴を含めた海洋性レクリエーションの自然条件、社会条件のポテンシャルは異なる。それゆえ全国的にみた北海

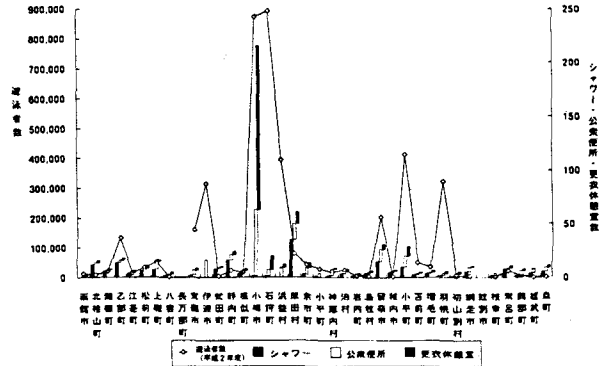


図-2 遊泳者数と遊泳関連施設

道の海水浴場の自然条件についてふれる。海洋性レクリエーションの重要な項目である気象条件については、宇多らがわが国の77沿岸のうち島などを除く44沿岸について全国の沿岸域を類型化している。北海道については①太平洋側に面する根室、十勝釧路および日高沿岸と②オホーツク海、日本海に面する北見、後志松山、石狩湾および天塩沿岸を対象としている。これによれば各沿岸の気温、水温等の5項目について検討した結果、三陸南以北ならびに秋田以北の海岸はいずれも利用に適する期間は1年のうちわずかな時期に限定されるとしている。実際 道内の主要な海水浴場の開設日数の平均は夏期の30日間程度である。また 海域を利用する場合の波浪条件はその種類によって利用波高は異なる。海水浴場も含めた海洋性レクリエーションに望まれる波高の評価は北海道の沿岸域では海水浴をはじめとする夏期の利用が中心となる海洋性レクリエーションに適している。特に日高胆振沿岸、北見沿岸においては夏期以外においても海洋レクリエーションに適する評価となっている。しかしながら気温も含めた自然条件では北海道の海水浴場は宇多らという適性基準からみて、沿岸条件は必ずしも良くない。この様な背景にあるにもかかわらず、道内の海水浴場では夏期の遊泳可能期間中は利用者で賑わいをみせているのが実情である。この短い遊泳期間のため日集中度が高いことが全国からみた北海道の海水浴場の特徴とも言える。それゆえ、近年余暇活動に対する要求の高まりとも相俟って、安全で潤いのある快適な海洋レクリエーションの場が求められるようになってきた。北海道の沿岸域は自然が豊富であるがゆえ、全国的にも自然条件が厳しく、海水浴も含めた海洋性レクリエーションに対する需要を満たすことが難しい面がある。その需要に応えるには波浪制御による利用期間の延長、侵食海岸における海浜地造成などの人工的な海岸環境を創出する必要があり、快適な海岸環境を整備する目的で事業化された海岸環境整備事業により実施されてきた。

4. 関連事業制度について

海岸事業が本格的な国土保全事業として法律に基づいて実施されるようになったのは昭和31年に制定された「海岸法」である。それ以降、海岸行政は関係4省庁において実施されることになった。しかしながら近年における国民生活の向上とともに、レクリエーション需要の高まり、ならびに良好な海岸環境の保全を目的とし、昭和48年度から海岸環境整備事業が着手された。

事業内容としては、海岸の環境整備を図り、その利用の増進に資するために、離岸堤、突堤、階段式護岸および護岸(堤防も含)などの施設、養浜工による海浜造成、遊歩道、植栽等である。この事業は昭和48年度に18箇所、12億6,000万円(国の補助率1/3)の予算で発足したが、昭和59年度には177箇所、121億4,700万円となっている。³⁾

5. 人工海水浴場建設計画における留意点

北海道は気象・海象条件等の点で海洋レクリエーションに必ずしも適していないことから、全国の他事例と同じような海水浴を主体とした施設計画を主眼とするのではなく、シーズンオフの運用対策も考える必要がある。そのためには本来の海水浴以外の多目的利用を可能とする異種施設との組合せも考えられる。例えば海浜地における人工プールでの遊泳期間以外の魚貝類の増養殖、プールサイドの通年の利用を可能とする魅力的な公園の構成等である。また北海道は海水浴場に至るまでの交通が不便であることから自家用車での移動を考えると駐車場は不可欠なものである。それゆえ海水浴利用期間以外での駐車場を兼務利用したサイクリング場、ミニゴルフ場等も考えられる。海象条

件が悪いことから波浪等の外的要因から海水浴利用期間の延長を図るように外郭施設を配置することも必要となる。さらに北海道では漁業が盛んであることから地元漁民との調整も大事なことであり、施設計画時には地元漁民の利害をも十分考慮する必要がある。

全国的に利用者サイドの余暇と所得の増加のためマリレクリエーションに対する需要が高まると予測される今日、利用者側の質に対する欲求が向上するものと考え。特に北海道では観光漁業の運営、海産物の商品化等による漁業収益の確保により海水浴場のシーズン偏向性をやわらげる意味において集落計画も含めた長期的な視野に立つ施設計画が必要である。

6. 道内人工海水浴場の事例

6.1 元和海岸（漁港海岸）

元和漁港海岸は後志松山沿岸の乙部町に位置し、江差から車で30分、函館から約2時間の距離である。海岸線は天然の岩場で、窓岩と呼ばれる特異な岩などがある景勝地として知られており、きれいで澄んだ海であることから町内外より海水浴場として利用されてきた。

昭和55年度、漁港海岸の崖の上に農村地域農業構造改善事業（野外緑地広場、キャンプ場、自然環境活用センター等）が採択されたのに合わせて、昭和56年度より漁港海岸環境整備事業が実施され、平成7年度で事業の完了が見込まれている。計画での年間総利用者数は78,400人を見込んでいたが、昨年実績で約96,000人が本施設を利用している。本施設の概要は図-3のとおりで、特に遊歩道におけるループ型橋梁と隧道が特徴的である。

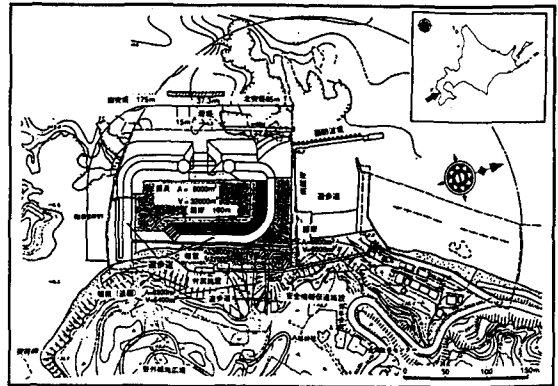


図-3

6.2 汐見海岸（通称イタンキ浜；建設海岸）

汐見海岸は日高胆振沿岸西端の室蘭市に位置し、特定重要港湾の室蘭港に近接し、JR東室蘭駅から2km、国道36号、37号がすぐ近くを走るなど、交通の便が非常に良い海岸である。

汐見海岸の延長は約2kmの砂浜海岸であるが、太平洋に面しているため、台風による高波浪が来襲する地区でもある。また、室蘭市内には砂浜海岸が少なく、かつて海水浴場として市民に親しまれてきた海浜は、臨海工業用地の確保という地域開発の要請のもとに消失していった。このような背景により、海水浴場としての整備が強く望まれ昭和49年度から昭和59年度にわたり海岸環境整備事業が実施された。また背後では室蘭で3番目の規模を誇る25.5haの潮見公園（総合公園）の整備が進められている。本施設の概要は図-4のとおりで、昭和56年7月に海水浴場として開設されて以来、海水浴客や1年を通してサーフィンを楽しむ人々で賑わっている。

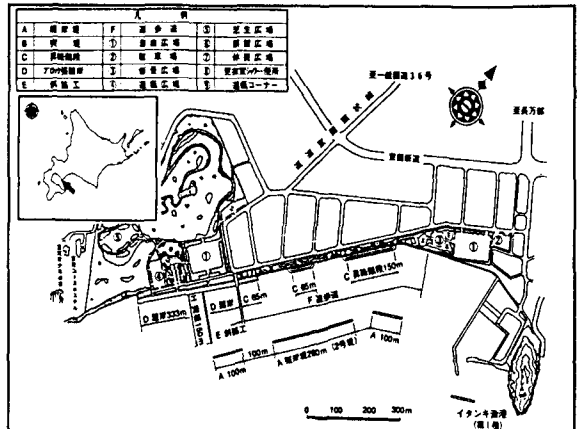


図-4

6.3 小平海岸（建設海岸）

小平海岸は天塩沿岸南端の留萌郡小平町に位置し、留萌市内から車で約10分の国道232号線沿いにあり、旭川から1時間30分、またオロロンラインの開通により、札幌から3時間30分の距離にある。海岸線は南北に伸びる海岸で、沖合には岩礁が点在し、海浜は浅い岩場と砂浜の景勝の地となっている。

本海岸には旧国道の直立護岸があり、以前は海浜の利用もままならない状態であった。昭和47年、背後の台地に自然休養村（農水省指定）、青少年旅行村（運輸省指定）等による公園が整備され、年々海水浴場としての利用が高まり、昭和50年度から平成2年度にわたり海岸環境整備事業が実施され、背後の公園と一体となった海浜公園が整備

された。本施設の概要は図-5のとおりで、道北、道央圏の人々の海水浴、キャンプ、磯遊びの場として利用されている。

6.4 広尾海岸（建設海岸）

広尾海岸は十勝釧路沿岸西側の広尾郡広尾町に位置し、帯広から車で約1時間30分の距離にある。えりもより広尾に至る海岸線沿いに国道336号線（黄金道路）が走り、日高山脈が海岸線まで迫り、変化の激しい雄大な海岸景観を有している。本海岸は波による崖侵食が著しく、前浜は狭く背後は丘陵地形であったが、この丘陵地に緑の村『シーサイドパーク広尾』（遊園地、水族館、キャンプ場等）が整備され、これに合わせて、海岸環境整備事業が昭和58年度より実施され、昨年海水浴場の仮OPENを行ない21,000人の人々が利用した。しかし、整備はまだ途に着いたばかりであり、今後直高20m程ある崖を、単に崩落防止だけでなく、崖上と崖下を結ぶ動線として野草園を考え、又北側に展開する海水浴場施設を整備する方針であり、全体施設の概要は図-6のとおりで、完成時には約120,000人の年間利用客を見込む施設となる。

7. あとがき

北海道の海岸部は夏の1カ月間程度非常に賑わいを見せる。しかし我が国の余暇活動の需要増加が叫ばれる今日においても北海道の介す意欲を含めた海洋性レクリエーションは1年のある時期を除いて、必ずしも快適な環境が整っているとは言いがたい。この為、波浪制御、海浜地造成等の人工的環境を整えることにより、海水浴利用期間の延長、増養殖等の多目的利用が可能となるものと考えられる。最後に本稿を書くにあたって資料等のご提供をいただいた関係各位にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 1) 北海道海水浴場概要調査：北海道海水浴場所在市町村協議会，平成2年11月
- 2) 宇多 高明，武中 信之：海洋性レクの適性基準から見た全国沿岸域の類型化，土木技術資料，31-11，1989
- 3) 建設省河川局編：海岸統計，昭和60年度版，1985

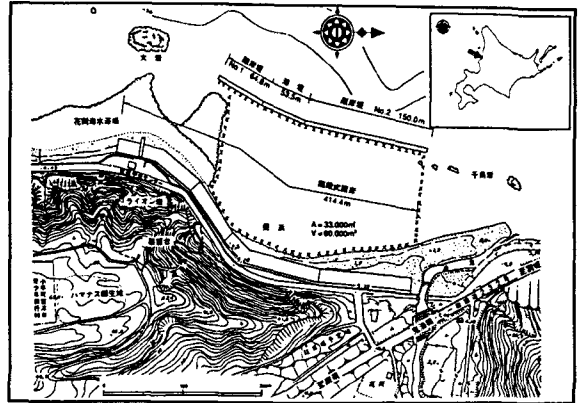


図-5

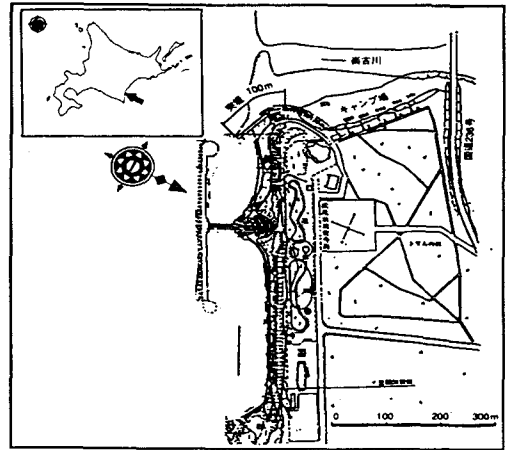


図-6